

## 第 15 回富士海岸保全検討委員会 議事要旨

日 時：令和 8 年 3 月 5 日(木) 15:00～17:00

場 所：静岡パルシェ 7 階第 2 会議室

出席者： 高知工科大学 佐藤教授  
東京大学大学院 下園教授  
水管理・国土保全局 柄沢海洋開発企画官  
国土技術政策総合研究所 柴田海岸研究室長  
静岡県交通基盤部 山田河川砂防局長（代理：柴田班長）  
中部地方整備局河川部 加納河川調査官  
静岡河川事務所 川嶋事務所長

### < 議事 >

#### ○報告 1：沼津～富士工区の承継について

- ・ 県の方にも移管を目指してよいかご意見を伺いたい。
- ・ 県としても国が良好に管理している状態を引き継ぎ、移管後も良好な海岸管理ができるか確認を進めている。

#### ○報告 2：富士海岸の概要・委員会の経緯等について

- ・ 「現状汀線を維持する」という考え方は気候変動を踏まえると適切とは言いがたい。海面が上昇する時代に無理な投資は続けられないため、表現を考える必要がある。
- ・ 富士川から砂の供給がほぼ見込めない中で、養浜を継続的に何万 m<sup>3</sup> もやっていくのは持続可能なのか。砂に頼るだけでなく、他の手段も含めて検討すべきではないか。
- ・ 侵食対策と高波対策を切り分けず、一緒に議論するべき。土砂管理の問題は広域的な支援体制が必要である。

#### ○報告 3：富士海岸の事業計画について

- ・ 事業計画の変更が検討されているが、県への移管のタイミングも踏まえて、全体的なスケジュール感を共有する必要があると思う。

#### ○資料 1：前回委員会の指摘事項と本委員会での審議事項

- ・ 特になし

#### ○資料 2：富士海岸の土砂動態について

- ・ 全体で砂が増加している数字が出ているが、水深 20m 以浅では減少している。プラス 3.3 万 m<sup>3</sup> という数字が独り歩きしないよう、厳しい現状認識を持つべきではないか。
- ・ 「浜にはかなり捕捉されているが沖へも流出している」という表現が適当である。約 30 年間のサンドバイパスや養浜の総量と、蓄積した量を比較できるように整理すべき。
- ・ 毎年 140m ずつ砂が東へ動いているというが、長年の離岸堤等の整備によって、投入した土砂が砂浜としてしっかりと捕捉できていると評価してよいか、引き続き検証していく必要がある。

○資料 3：富士海岸の侵食対策について

- ・土砂流出防止工の背後に砂が回り込んでいる状況が見られたのは素晴らしいが、港からのサンドバイパス量が減った場合、前提が崩れてしまうのではないかと。  
⇒供給量が減るのは非常に悩ましい問題。海岸事業としていかに養浜量を減らすか引き続き検討する。
- ・土砂流出防止工の周辺（No.49）が洗掘されているが、その理由は何か。将来的には埋め戻されて安定するという予測か。  
⇒設置直後に砕石が流出することは当初の実験でも確認されており、想定内の動きである。サンドバイパスの土砂が到達すれば今後少しずつ埋め戻されると考えている。
- ・サンドバイパス量が減る中で養浜量を減らす目的があると思うが、土砂流出防止工の効果は養浜計画の計算モデルにどう反映されているのか。  
⇒サンドバイパスの土砂の塊が東へ移動しており、その影響による漂砂量の増加が計算に組み込まれている。
- ・昭和放水路の局所的な箇所だけが基準を満たさないからといって「不可」とし、養浜を続ける計画になるのは疑問。浜でなくても総合的に安全が担保されれば良いのではないかと。
- ・砂防事業（大沢扇状地等）で発生した土砂を海岸に運ぶ取り組みなど、流砂系全体での総合土砂の取り組みは今後も連携して続けていくことが望ましい。

○資料 4：今後の進め方

- ・特になし

以上